

アラサル故ニ我政府ニ乞ヒ一ノ良港ヲ借り修復ヲ加ヘント
シ嚴談シテ置カス同國戸田ノ良港ナルヲ檢知シ爰ニ入ラ
トス我政府モ時災ノ困難情實ノ黙止カタキヲ以テ終ニ其請
ヒニ應ス魯人戸田ニ到リ屯營シテ敵國ニ備ヘ下田港ニテノ
破艦ヲ以テ回航ス伊豆御崎ヲ廻リシ際艦内ニ海水注入シ防
止ス可ラス終ニ全ク沈没シ片板ヲモ殘サス此海ヤ殊ニ水深
ク大抵七八十尋故ニマタ奈何ントモ爲スヘキ策ナシ乘艦人
員ハ端船ニ乘シ纜カニ死ヲ脱ス
魯人之不幸此不測ノ天災ニ罹リ且ツ其艦ヲ失フ災厄重リ到
ルトイフ可シ然レモ猶勇ヲ鼓シテ敢テ屈セス再ヒ我ニ需ム
ルニ木材鍛工船工ヲ募集センコトヲ要ス乘組ム所ノ船工鍛工
ヲ首メトシ新ニ造船ノ業ニ従事ス艦士等勉勵實ニ驚ク可シ

終ニスク―子ル船二隻ヲ造リ是ニ乗シテ北海ニ向ヒ去ル此
魯國ノ一大不幸ヤ我カ幸トナリ我カ諸工艱苦ヲ經タリト雖
モ西洋造船ノ諸法暗ニ是ヲ實地ニ得タルモノ多シトス假令
ヘハ造船ノ初龍骨ヲ以テ造船臺ニ拵ヘ首材後材ヲ建テ肋材
ヲ植ヘ船梁ヲ固着シ外板ニ及フ等或ハ緊帶諸部ヲ以テ全體
ヲ固メ外銅板ヲ張ルニテ―ルニ浸セシ厚紙ヲ張り銅板ニ及
フ等諸法ノ如キ我邦ニ傳フルモノ此時ヲ以テ最始トス且ツ
松根ヲ蒸焼シテテ―ルヲ製シ生麻ニ浸入セシメ後諸索ヲ綯
フ此他我邦絶ヘテ無キ處是ヲ一時ニ備フ豈ニ邦家ノ幸ト言
ハサルヘケンヤ
此後是等ノ法ニ因テ造ル船ヲ君澤形ト稱シ君澤形第一第二
第三漸次ニ増製セシム魯人ノ造リテ乘リ去リシ船モ後我ニ

送り還附シ當時ノ高意ヲ鳴謝ス
 此時魯人ニ從ツテ就業セシ諸工多ク幕府海軍所附屬トナリ
 其中良工ノ今尙存在シテ横須賀ニ到リ諸工ノ長タル者數名
 ヲ存ス

又此際同所へ出張セル官吏予ニ告ケテ曰ク魯人之勇猛驚ク
 可シ此大災厄ニ逢フテ沮喪ノ氣勢ナク偶々外國船ノ下田洋
 ヲ航スルモノアレハ遠望シテ必ス英艦ノ到レルナラント士
 官水卒一令ノ下ニ其國旗下ニ屯集シ入ヲハ決戦セントス其
 狀勢凜乎トシテ撓マス造船中時々此ノ如シ其勇鷲之性質事
 ニ臨ンテ活潑ナルヲ實ニ歎稱ス可シト云々
 又魯艦破損シ下田港ニ繫リシ際其武器ヲ揚陸ス後チ大砲數
 門ヲ以テ我カ政府ニ送り厚意ニ答フ其員數左ノ如シ

- | | |
|------------|------|
| 一 鐵製六拾斤長加農 | 四 挺 |
| 一 同 三拾斤短加農 | 十八 挺 |
| 一 同 貳拾斤長加農 | 三十 挺 |

ノ五拾貳挺

當時ノ筆記ヲ案スルニ此魯國軍艦フレガット安政元甲寅
 年十月我カ中國海ヲ通航シ大阪ニ入り當地ノ奉行ニ申立
 ツルノ事アリテ後出帆シ下田港ニ入津セシナリ同年十一
 月朔日奉行ト應接ス上將布恬廷艦將次官ボシセツト遭難
 ノ後當時ノ顛末等公文ヲ得タルヲ以テ重複ヲ厭ハス爰ニ
 擧ケ猶事情ヲ詳悉セン爲メ前文ノ參照ニ備フ

甲寅十月魯西亞船大坂港入津に付同所町奉行より下田奉行に之掛合書并魯西亞船へ相渡候證書

當九月十八日魯西亞師船壹艘大坂港に渡來安治川沖に碇泊致し候に付拙者共組與力兩人同所御船手組與力壹人に右夫々同組同心共差添夷船に乗組及引合候處大坂御奉行台下と漢文を以て認候封書差出し候得共當地者應接之地に無之候間難受取趣申諭し碇泊中追々及引合候上取計方之儀江戸表に相伺候趣も有之處當地者外國應接之場所に無之候間早々長崎下田之内に可相廻旨申諭し方御下知有之且石河土佐守松平河内守川路左衛門尉よりも伊勢守殿御内意之趣を以て同様之次第且つ筒井肥前守川路左衛門

尉先達て於長崎及應接候魯人布恬廷と申もの候は、右兩人待受居候儀有之可成ハ其御地に相廻候様可申諭旨等申越し候に付其段爲申聞候處其儀者承知致し居候体に候得とも其地に相廻候證書を望み候に付別紙之通認與一同紙同文之壹書を各様方に相廻置候趣も申聞候依之爲御心得右別紙差進申候

一右船中材木食料乏敷乞求候へとも前書之通り當地者應接之場所に無之候に付容易に難差遣併水ハ必要之品に付難捨置依之先づ拙者共限り之存寄を以て水計當所於て相與へ候其餘之需物者江戸表に伺之上及沙汰候趣申諭し候内追々急ぎ立御地に相廻候に付てハ大海を難走又何を食し可申抔と申立一体軍艦之義にも有之食料等者相應貯も可

有之義に候得ともいつれも穩に申諭し早く御地に相廻候様可取計旨厚御沙汰之次第も有之候間速に當港退帆内海を相離候儀に候は、水同様拙者共存寄を以大洋口におわて相與へ候積申立候處當月三日早朝何之沙汰も不致俄に當港出帆致し候に付不取敢大洋口紀州加田浦に前書與力同心共差向右需物之品も船積致し差出候得共同日并翌四日とも大風高波強く右品物積入候船加田浦に難乗付異船者四日朝加田浦に着船致し罷在與力同心とも追く同所に罷越候得共何分右品物着不致内異船出帆差急き難止次第に相成前書申聞候趣致相違候而者如何と心配致し候に付不取敢紀伊殿役人の申談加田浦に有合候需物に引當候品之内少く調達致し異船に相送候處一旦ハ同船に取入候に

付跡品追く差越候趣仕形を以相諭候内何故哉一旦船中に入候品右運送船に差戻其儘同所出帆致候右者出帆差急き邊敷場所に付諭之趣解兼候哉又ハ右相送り候品而已と心得不伏を生し右躰之及仕義候義にも可有之哉何分難相分其節可申諭演舌書并相送候品之目錄等も可相渡積候處是亦未九相渡不申内右体出帆致候に付早速見留船追く差出候得共最早遙に乗出阿波土佐之沖手大洋に至り候趣に有之候間其海港に相廻り候は、右掛違之次第御心得御取扱有之様致度候事

寅十月

佐々木信濃守

川村對馬守

伊澤美作守様

都筑駿河守様

魯西亞師船壹艘以去月中旬到於大阪之港因宣諭命令東到下田授以此文書以爲他日下田奉行之證左云

嘉永七年甲寅十月

佐々木信濃守

川村對馬守

下ヶ札

此證書當港出帆以前相渡候様頻而申立候に付彌出帆以前本書相渡候旨演說書相添先づ草稿相渡置候に付追て本書相渡候節右草稿可差戻旨仕形を以申聞候得共終に草稿不差戻本書并草稿とも受取候儘出帆致候尤草稿之

方は九月之日付に認有之候

甲寅十月八日伊勢守立田祿助を以下田奉行に下附

去月十八日當地安治川沖に渡來之魯西亞船御下知之通り下田港に可相廻旨申諭昨三日辰中刻俄に安治川沖退帆仕候義に付申上候書付壹通佐々木信濃守川村對馬守差出候に付進達之仕候猶委細之儀者追々可申上候得共不取敢此段以刻附申上候差急き私一名にて申上候以上

十月四日

土屋采女正

十月十四日下田奉行届

魯西亞船渡來之儀申上候書付

都筑駿河守

今十四日辰刻頃下田より西手豆州石廊崎沖合に夷船壹艘
東へ向間切居候様相見候段武山遠見番之者より届出引續
近浦より追々同様届出候後右本船者神子元沖に間切
居未刻頃解にて異人拾五六人乗組手石浦之方へ漕参り候
を漁船見付當所より兼て差出置候水先案内船に爲相知候
に付右船方之者共差心得異人乗組候解に乘附申刻頃當湊
に引入應接之者罷越候を待受候様申聞候得共不承受押て
上陸致候折柄應接掛り與力通詞等罷越同所は仕越御普請
に付混雜之場所に候間其段申聞市中を離れ候港内柿崎村

濱邊辨天堂に右解に而連行一ト通り及應接候處當月三日
大坂安治川退帆致候魯西亞船之由筒井肥前守等罷越居候
ハ、直ニ應接可致若シ到着無之候ハ、直ニ江戸表に可相
越旨夷人共申之候間肥前守等最早江戸表發足致候頃合ニ
も候間江戸表に罷越候而者定而行違不都合ニ可有之候ニ
付何ニ當所ニ而相待可申尤薪水食料等欠乏之品差支無之
様取計遣旨申聞且大坂町奉行より相渡候證書之儀をも相
尋候處本船ニ差置候旨申出尤當港に碇泊可致否者明朝可
相答旨異人共申之右解ニ而一同立戻り申候右者何れにも
當港に引付候見込ニ付支配組頭とも評議之上當春中之振
合を以て大久保加賀守太田攝津守水野出羽守に人數差出
方申達置先不取敢此段御届申上候以上

都筑駿河守

十一月朔日

魯西亞使節に被下物之節手續

朝四時役、一同福泉寺に相揃候事

一五半時頃魯船に爲案内下田奉行組與力御小人目付差遣直

ニ使節を誘引致休息所迄相越候事

一支度整次第休息所爲案内下田奉行組與力御小人目付差遣

應接所に誘引致候事

一玄關上迄中村爲彌出迎扣所に爲相扣候事

一被下物餉付相濟候上爲彌使節を誘引致、應接所に罷越役

出席立あから被下物之儀肥前守達之

先達而長崎表ニ於て被差出候獻上物歸府之上言上及ふ

處御受納相成候依之爲返物目錄之通被下之

一魯人御禮申上候而座ニ付候様肥前守達之此方も座ニ付御

品者扣所迄引之役、一通り挨拶有之掛合之料理被下候

旨肥前守申達同人并左衛門尉計り相残り外役々扣所に引

但支配向者刀を持ち横座ニ支居候事

魯人御禮申上退去此方役、一旦退座御品魯人扣所に爲

扣出置候而役、出席着座魯人も罷越候てイスに掛ル但

※持參

右差掛り手續書朱書之通直ル

一料理向差出肥前守左衛門尉對食畢而役、再ひ出席肥前守

挨拶之上爲彌使節を扣所に誘引致退散爲致候事

一魯人退散畢而役く一同退散之事

一上陸場所休息所應接所之三ヶ所御固メ差出候事

下田港見分致し候處手狹ニ有之殊ニ冬之氣候ニ至り大軍

艦之爲め不安心之場所と存候依之魯西亞國之全權兼て承

知罷在候江戸港に罷越日本政府ニおゐて全權之御方くは

取結之條約致度希候

右全權之命を請て

千八百五十四年第十二月廿一日

カビテイノイテナント

魯西亞國フレガット船ダイヤナ
號ボスシート

右之通和解仕候以上

堀達之助印

志筑辰一郎印

甲寅十一月廿一日下田に到來 伊勢守下附

筒井肥前守

川路左衛門尉

伊澤美作守

都筑駿河守に

松本十郎兵衛

村垣與三郎

古賀謹一郎

覺

魯西亞船取扱方之儀ニ付去ル十一日相達候趣も有之候處
彼方より追く申立候趣實に無餘義相聞候間伊豆國中ニ船

修復之場所無之候上者不慮之天變に逢候義を
御仁恤被施出格之譯を以て全く此度限り相州野比長濱兩
村濱又者同所久里濱之内壹ヶ所御差免一被成候間兩所之
内は船引揚修復爲致乗組之者共も同所最寄寺地民家又ハ
小屋補理入置取締方等入念遊歩測量
御國禁堅相守猥成儀無之様申渡右者地震津波非常之天災
ニ付此度限り之事ニ而向後右場所は決而乘入申間敷旨證
書取置差許候様可被致候尤右船修復入用之品并食料等者
願之通り被下候様可被取計候且又野比長濱村兩村海濱并
久里濱之内評議之上此方ニ而差免候様可被致候伊豆下田
之外別ニ一港を開候儀者決而難相成候間其趣を以猶精心
を盡し可被申諭候事

覺

魯西亞船修復場所之儀此度限り野比長濱村海濱并久里濱
之内御差許相成候處兩所とても港ニ者無之海濱之事故波
荒之義も可有之候右を猶又彼方より難澁申立候様ニ而者
際限無之義ニ而出格之御處置をも無詮事ニ相成候勿論此
後如何様申立候共浦賀より内手之方は乘入候義者決而難
相成候間其趣能く被心得何れにも兩所之内ニ而船修復可
致旨篤と申諭候様可被致候尤魯西亞船兩所之内ニ相越候
節者爲取締中村爲彌永持亨次郎森山榮之助附添相越候義
と致候事

甲寅十一月廿九日附御用狀ニ而下田ニ到來

水戸殿より

魯西亞船破損ニ付於豆州戸田浦修復被仰付候由右ニ付而者石川島大船製造ニ被相掛置候者共指遣魯西亞船修復之模様見聞爲致公邊より御貸被遣候職人ニ相交爲相働候ハ、向後大船製造心得ニ可相成被存候間不苦候ハ、水戸殿領分より石川島ニ相詰居候船大工四五人ニ士分兩人爲附添諸事手輕之仕向ニ而戸田浦ニ被差遣度御聞濟ニ相成候ハ、於彼地誰之差圖を爲得可然哉宜御差圖御座候様被致度此段御自談候様被申付候

十一月

御附札

書面之通被成候様可申上候委細之義者石河土佐守松平河内守可承合候

寅十二月二日下田差立御用狀

伊賀守ニ進達

魯西亞船之義ニ付申上候書付

伊澤美作守
都筑駿河守

魯西亞船破損爲修復當所退帆之義者去月廿二日申上置候處同廿七日五時頃日本船ニ而異人貳拾人駿州一本松ニ上陸仕候ニ付手當申付置水野出羽守ニ人數差出可申旨申遣

異船之義者同州小濱に船掛止候旨江川太郎左衛門手代共より戸田村出役之支配向に申越候に付不取敢御普請役壹人御小人目付壹人手附出役壹人通詞壹人異人上陸場所に罷越候段戸田村出張之者より申越候處右魯船之義去月廿七日秋山主税杉浦主殿知行所駿州富士郡宮島村之内字三軒家濱より五六拾間程沖之方に掛ケ留追入淫相増漂出方不行届之様子海岸高浪に而ハッテラ着岸難相成候に付壹人ツ、胴繩を掛ケ水中に飛入大勢大繩に而引揚候義に御座候由翌廿八日早朝より夕方迄布恬廷初々四百人程右濱方に上陸仕候に付廿七日夜戸田浦より一本松新田に罷越候御普請役御小人目付私共手附出役之者に太郎左衛門より打合同人手代共差出不取敢食料手當小屋掛等取計

同人義も最寄内藤劍之丞知行所鮫島村迄廿八日夜出張仕候旨最寄寺院又ハ人家に差遣寒氣為相凌度候處地震に而潰家多く取計兼且通詞義も同村に着仕候に付戸田浦に差廻方其外之義昨朝布恬廷に應接之上委細可申越旨不取敢太郎左衛門より昨夜川路左衛門尉に急注進申越候由依之御勘定組頭中村為彌に取計方委細申合即刻出立為仕候段今曉左衛門尉より申越候且大久保右近將監地震に付駿府表在勤罷在候處當表渡來之魯西亞船豆州戸田浦に参り候積之處風波之為に破船致候様子に而駿州宮島村沖に碇泊貳拾人程之異人上陸仕居候趣心得迄に同人より申越候書狀今朝到來仕候猶委細之儀者應接掛り太郎左衛門より可申上候得共先此段御届申上候以上

十二月二日

伊澤美作守

都筑駿河守

寅十二月四日御用狀ニ而差立ル

魯西亞船之儀ニ付申上候書付

伊澤美作守

都筑駿河守

去月廿六日より追々申上候魯西亞船之義駿州官島村沖に漂着異人上陸致假小屋出來何れも差置本船戸田浦に廻方手段仕一昨日頃使節并上官之者貳拾人程漁船に爲乗組御普請役壹人御小人目付壹人通詞附添本船者漁船數拾艘ニ而同日八半時頃官島村より二三里程引出候處引船何れも相離豆州内浦に漕去候ニ付遠眼鏡ニ而見及候處西風烈

敷高浪ニ而本船八分通り相沈ミ内浦之方に追々流寄候旨
睨とハ相分兼候得共遠見仕候始末不取敢私共支配向戸田
村に服役之者より昨夜申越候處右魯船之義入淫彌増覆没
可仕体ニ付異人共義ハ不殘上陸本船之義ハ數拾艘之引船
差出戸田浦に引入候積一昨日四半時頃三四里程引出於
沖合高浪相立引船相離候旨追々注進ニ付江川太郎左衛門
義濱邊に罷出及見分候内忽ち覆り漁船ニ乗組候使節并外
三拾人程之夷人共ハ水野出羽守領分駿州江の浦に向漕寄
て候様子ニ付太郎左衛門儀不取敢同所に罷越候上猶可申
越旨昨夜同人より川路左衛門尉に急注進申越候由尤委細
之義ハ應接掛り并太郎左衛門より可申上候得共先此段御
届申上候以上

十二月四日

伊澤美作守
都筑駿河守

十二月廿二日下田奉行届

魯西亞使節條約爲取替相濟候義ニ付申上候書付

伊澤美作守
都筑駿河守

昨廿一日當所長樂寺應接所ヨ魯西亞應接掛り筒井肥前守
川路左衛門尉松本十郎兵衛村垣與三郎古賀謹一郎其外役
々出張仕私共も出席魯西亞使節布恬廷柿崎村玉泉寺より
罷越條約爲取替無滞相濟申候ニ付同寺ニ在留魯人共私共
方ニ而取扱候様應接掛りより申聞候故引受申候尤關乏品

相求度趣申立候間亞米利加人同様爲求候積り御座候依之
此段御届申上候以上

十二月廿二日

伊澤美作守
都筑駿河守

卯二月八日伊勢守より下田奉行ニ下附

箱館奉行ニ

豆州戸田村滞留之魯西亞人共今般下田港ヨ入津之亞米利
加商船ヨ乗組追々歸國致候筈ニ候尤カムシヤツカ又はウ
ルツフニ罷越候内若氷海ニテ渡海難相成候ハ、箱館ヨ入
津可致由ニ候間爲心得相達置候彌相越候ハ、蝦夷地其外

取締筋等嚴重可被取計候委細之儀は箱館奉行可被談候
右之通松前伊豆守に相達候間得其意可被取計候

伊勢守下附

大目付に
御目付に

先達而下田表に渡來之亞米利加商船出帆之節魯西亞人とも乗組歸國致し候筈に候依之向くは相達置候事

卯二月

寅十月十五日渡來魯西亞軍艦蠻名フレガット

船號デアアナ船長三拾貳間餘

使節フーチャチン船主リツスケ

次官通辨官兼 ボスセツト

乗組五百壹人 内水夫三人滞留中死去 大砲五拾貳挺

右者條約爲取結渡來碇泊中寅十一月津波ニテ船破損所出

來爲修復豆州戸田村港御貸渡に相成同月廿六日當港出帆

十二月二日駿州官島村沖ニテ逢難風沈没

一卯二月廿七日渡來亞米利加商船スクー子ルに乗組魯西亞

人使官九人下官百五拾人同廿九日戸田村出帆

一三月廿三日戸田村ニテ新造之シコナ 船に布恬廷始百人程

乗組カムシャツカへ退帆

一六月朔日アメリカ商船ケレ一タフ 船に殘る魯人シルリン

ケウロソスホフシキンガリヨースケ始下官共乗組戸田村

退帆

甲寅十二月所司代に達

當月豆州下田港に魯西亞船碇泊致候に付早速爲應接役
差遣願意之次第論談爲及候處彼國より差越候書翰にも有
之候日本魯西亞兩國之境界相定候義奥蝦夷地エトロフ迄
日本所領之段承知仕從北蝦夷地カラフト全島日本領之旨
申談度義には候得共カラフト島之義は當夏見分之者差遣
委細に取調候處全島蝦夷住居之義には無之北之方には山
丹種類ヌメレンクル夷等部類尤有之候旨境界難相分次第
も有之此上如何決斷も可相成哉未相分候義には候得共
御國境相定候義不容易事に候間應接之趣一ト通り申進候
御程合次第傳奏衆にも内分相通置候様被存候

十二月廿三日

- 内藤紀伊守
- 久世大和守
- 松平伊賀守
- 松平和泉守
- 牧野備前守
- 阿部伊勢守
- 脇坂淡路守殿

左ノ書牘ハ俄羅斯人我國ニ滯泊中達セズシテ歸國之後延
着セシモノナリ元ヨリ我ニ關係無キモノト雖此之ニ由テ
觀ルルハ其國情ヲ察スルニ足ル可キモノアルヲ以テ茲ニ
附ス其故如何ナレハ魯人本國遭難ニ當テ他邦ニ使ヒシ不

測之天災ニ罹ル此災害並ビ至ルノ時ニシテ益々銳氣奮勇
一モ屈撓スル者ナシ然ルニ其内國ニアル者之ヲ憂虞スル
ノ深キト此ノ如シ是レ平素人心固結協戮一和ノ致ス所ナ
ル可シ吁天下ニ強大ノ國ト稱セラル、ニ到ルモ亦此ニ在
ルカ

覺

魯西亞本國より船中諸士之書十通

内

- 布恬廷之書 一通
- 吳志傑勿知之書 二通
- 魯世烏之書 一通

勿牙波泥之書 一通

巴胖之書 一通

古爾仁羅之書 一通

刺薩列之書 一通

以上八通和解仕候

布恬廷之獨乙文 一通

是は獨乙文ニテ難相分和解仕兼候即原書上包々○印
小札付置候分

古華列斯哥之書 一通

是は三枚共形筆ニテ字体難相分和解仕兼候即原書上
包々○印小札付置候分

右之通御座候以上

辰九月

上原 八郎

名譽のワシリウイチ布恬廷に

貴君是を掌握せよ

フレガットシアナ船沈没に就ての注進ありて我等其難儀を察せり是に於て君等を能く知るものも知らざる者も皆其艱難の機に臨み生活の身命を得たるを賀す畢竟神助と臨機の勉強とに因てなり其時に及んては各不幸を叫號し身を天命に祈誓し誰壹人として天幸の助力を希望せざるはかゝといふ今此書を贈るの意は苦心を忍び無事に本國に歸らん事を祈る予かペテルブルガ都府に着するやミニステル官名に謁見して其様子を聞くにマリヌワシリウイチ人名

ハ一旦見へさりいか漂ふのみにて勝れたる神助に由て壯

健なり又彼か領地のミツロポウソ僧名の父ツポウニフシ

リヒーデク僧名は君に隨て去りいか少く身を傷めたりと

彼は君等も深く服従する事を證す因て天幸を祝し是を慰

めいといふ

早便あるを以て多事を記す能はず予か心中唯天幸を得て

九族の國に歸らん事を望み請ふ今其船士等々之數書を遣

す各是を掌握せよ爰に告る事あり君等の歸途は太平海に

沿ひ來るへい然らされは英吉利等の爲に防制せらるゝ事

あらん此の如き時に於ては「ツープ」急走の神名を頼み其飛力に

乗し速に歸る事を得は深く感服せん予君等の爲に善事を

思ひ神助を以て本國に招かん事を欲するのみ

千八百五十五年五月十二日 安政二卯年 四月九日

都府聖歇的爾勃爾舩に於て

亞爾賓門德利都

亞烏萃屈書す

右之通翻譯仕候以上

上原 八郎

高貴のヨシフ、アントノウイチ、吳志傑、勿知

船將布恬廷に隨て航海し今度甚しき艱難に逢へり然れども其地惣て親懇の取扱にて實に謝するに暇あきか如しといふ汝等不幸にして苦心すといへども神恵に由て恙あ

事大慶なり今時英吉利船所々に逍遙するか故に歸途甚た安からすよろしく其期を待ち其模様就て心安く歸國するにいかず因て彼の親懇を謝し常に將命に隨て信義を旨とし無滞歸り來らん事を欲すウスレシヤル人名君も是を示せり予是等の事を取扱ふべき任にあらされは唯汝の壯健にして歸るを待つ必ず疑心を生するなかれ布恬廷の汝に深切あるは予常に忘るゝ事なく是を謝せり是を以て心を安んじ其職を守るを要とす親友も其事情を知て是を慰めり然れとも祖母君ハ頻りに心配して汝の爲に幸福壯健なる事を祈念せり
久しく汝を見す果して勇武を保てるや假令海難にて歸途を失ふか如しといへとも必ず心氣を摧くなかれ唯正眞に

其旨を守り一隊の士と共に天幸の至るを待て事の成就を
禱るへい

千八百五十五年五月九日 安政二卯年 四月六日

會薩原傑勿都書す

仁惠なるヨシフ吳志傑勿知

此書を熟讀察知したまは、他日此贈書に増すならん是則
眞實ある思志を汲取らんことを願ふ處也嚮に船中皆無事
にして布恬廷の善良仁惠なるを告知せり依てニコライイ
ワノウイチ名人の許に至り其様子を尋ぬるに篤切多惠に
て其旨を示す併し過ちにてもありしにや、嘗て賀するの辭

なく左すれば成功ありとも損傷の事あらんかと察すれば
相逢ふの期あきか如く苦心せしかシアナ船の海難あるを
知り驚怖ふ堪へず心中鬱悶して音信の來るを待つ處にア
ングリチ名人強く驚駭して來書を差越せり於是初者其實事
を知り熟考するに及んで其愁心を脱せり何とふれば其重
任の中に居る事ふれば天神仁を與へざるなく是等を以て
船中皆無事也と聞く

一別以來相見の道を鎖されしかは往事の年月を思ふ處に
亦其天災に係りし苦心者如何計りあらんと深く感慨せり
併し衆心を引立ん事を欲し力を盡せるふれば神慮に應せ
し事と見ゆれども溢流せしといふには驚けり思ふに同一
光陰者送るといへとも其地と本國との別あるか如くにて

今此地者軍勢縷々として止むの期見へず然るに計らすも
音信ある事生活せざる者の蘇生せし如くふて神宜あるや
と覺へたり他人に其様子を聞くといへども微笑して十分
に意を語らば是に於て親き王族の許に行き苦心を述べし
に生活の有無を辨せずとあり此の如くにて既に三年様子
を詳にせざるは謂ゆる罪人の如し且齡も重ね往時とは違
ふ事あれば流行病杯に係らざるやふ心を用る事にかす
今時予を誑うさんとする者ありて甚た快よからず然れど
も絶へて是を用ひず且君の天幸を得て歸國せられん事を
待つ后来諸州に徘徊するも止り給はんか航海重任の中に
居事も免かれ給はんか是等の意を述べんとすれども自ら落
涙を催して十分にいふ能はず予今少く病に係るといへ

とも官醫も親懇にして苦とするに足らず計らすも君の仁
恵にて教書を得る事喜ばし是を觀るに一旦船中皆死を期
して救助せりと思ふに皆よく活命を得たり又其天幸はあ
りといへども歸途の便あく空しく日を送るのみにて樂し
からざるより實に然り予當今病に係るを以て對話の遅く
せん事を恨む併し其地に於ては恙なく自在に逍遙せりと
聞く兎角身體倦勞を生せざるやふに爲すへし時勢を以て
察するにもいや擣にあらんかと苦痛せしか無異儀消光し
且其地の取扱深切にて飢餓にも及はざるより誠に樂しけ
れ就ては歸途無事ならん事を祈る如何にウテツニコラ
イ名か其船中の商議より招延するとも歸限あければ心は是
を惱めり斯くいふといへども士官に居る者は勤功を積ま